里帰りの名品が奏でる、
日本美術の煌めき。

光琳、抱一、
蕪村、応挙、
若冲、蕭白、
北斎…

The Flowering of Edo Period Painting
Japanese Masterworks from the Feinberg Collection

ファインバーグ・コレクション展
江戸絵画の奇跡

平成25年度
鳥取県立博物館 企画展

2013年10月5日[土]–11月10日[日]

開館時間｜午前9時～午後5時 ○10月中の土・日・祝日は午後7時まで ○入館は閉館の30分前まで
※10月21日(月)のみ一部展示替えのため休館

観覧料｜一般＝1,000円／前売り・20名様以上の団体料金＝800円
○次の方は無料です／大学生以下、学校教育活動での引率者、障がいのある方・要介護者等及びその介護者、70歳以上の方

会　場｜鳥取県立博物館 2階 第1・第2・第3特別展示室・1階 美術常設展示室

主　催｜鳥取県立博物館、薔薇新聞社、美術館連絡協議会
協　賛｜ライオン、清水建設、大日本印刷、損保ジャパン、㈱日本通運、株式会社モリックスジャパン、株式会社吉備総合電設、三和商事株式会社
協　力｜全日本空輸、セインズベリー日本藝術研究所

左上から時計回りに、鈴木其一「朝顔図屏風」、長沢蘆雪「拾得・一笑・布袋図」、鳥文斎栄之「遊女と犬図」、円山応挙「孔雀牡丹図」、いずれも部分図。

鳥取県立博物館
TOTTORI PREFECTURAL MUSEUM

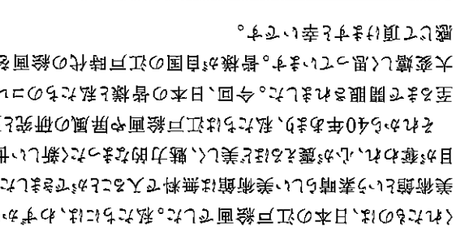
日本の皆様へ

新しい仏像が作られたときには、常に「開眼式」が行われます。これにより、その仏像に仏が宿ると信じられています。また、この儀式には、人々が生まれながらにもっている仏性を育むことを促し、個々の成長や覚醒への意識を高めるという意味もあります。

1970年代にニューヨークに住む二人の若いアメリカ人であった妻のベッツィーと私の目を開いてくれたものは、日本の江戸絵画でした。私たちには、わずかなお金しかなく、市内にあるメトロポリタン美術館という素晴らしい美術館は無料で入ることができました。この美術館で初めて日本美術に出会い、目が輝かれ、心が震えるほど美しく、魅力的なたくさんの新しい世界を発見することができました。

それから40年あまり、私たちは江戸絵画や屏風の研究と蒐集を通して、日本の歴史、文化、芸術に至るまで開眼されました。今回、日本の皆様と私たちのコレクションの一部を分かち合うことができ、大変嬉しく思っています。皆様が自国の江戸時代の絵画を楽しまれ、私たちと同様に、喜びと感動を感じて頂けますと幸いです。

［ベッツィー&ロバート・フェインバーグ］



左：谷文晁「雪山鳳凰図」江戸時代／享和2年(1802)
下：狩野派一「雲鶴図屏風」江戸時代／19世紀

引越しは

0120-154022
ひっこし は こちら

オフィス用品のことなら
モリックスジャパン

株式会社 モリックスジャパン
鳥取市雨滝町203-6 〒680-0912
TEL 0857-23-3641
URL http://www.morrix.co.jp

photo Michio Watari

◆関連プログラム

◇学習講演会
「日本美術に魅せられたアメリカ人 フェインバーグ夫妻」
日時:11月2日(土)14:00～15:30
会場:鳥取県立博物館2階講堂(参加費無料)
講師:小林忠氏(本展監修者・学習院大学名誉教授)
定員:250名(申込不要・先着順)

◇ギャラリートーク(会画組織学芸員による展示解説)
日時:10月5日(土)・11月9日(土)14:00～15:00
会場:本展展示会場(要観覧料)

◇ワークショップ「ミニ掛け軸をつくろう」
日時:10月19日(土)14:00～16:00
会場:鳥取県立博物館2階会議室、本展展示会場(要観覧料)
定員:小学生～一般20名(10月5日(土)より電話申込・先着順)
参加費:150円(作品絵はがき代)

| 交通のご案内 |

◉JR鳥取駅から↖バスで
▶100円バス「くるる」線ロータ「③仁風閣・県立博物館」下車すぐ
▶バーブ麒麟獅子A＝ータ(土・日・祝のみ)「⑥鳥取城跡」下車すぐ
▶春正・湖山・賀露方面行「西町」下車、約400m
▶市内回り袋川・中河原方面行「ちらべ銀座」下車、約600m

◉JR鳥取駅から↗タクシーで…約10分

◉鳥取空港から…鳥取駅行温泉バス「西町」下車、約400m

※当講演中駐21台駐車可能
(なるべく公共交通機関をご利用ください)

◉お車で…鳥取自動車道・鳥取ICより約15分

鳥取県立博物館
TOTTORI PREFECTURAL MUSEUM
〒680-0011 鳥取市東町二丁目124
Tel:0857-26-8042 Fax:0857-26-8041
E-mail:hakubutsukan@pref.tottori.jp
http://www.pref.tottori.jp/museum/homepage.htm

ファインバーグ・コレクション展 江戸絵画の奇跡

The Flowering of Edo Period Painting Japanese Masterworks from the Feinberg Collection

米国メリーランド州にあるファインバーグ・コレクションは、米国屈指のコレクターであるベッツィー&ロバート・ファインバーグ夫妻が蒐集した、江戸絵画を中心とする日本美術のコレクションです。

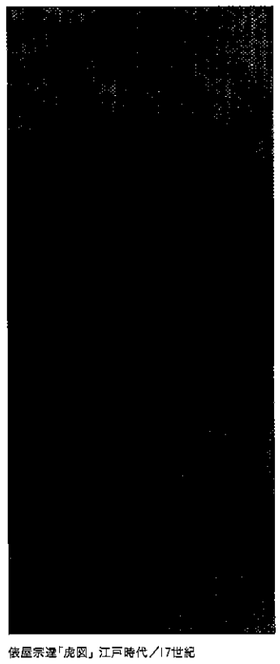
このコレクションの特徴は、狩野派や土佐派などの保守的な作品がほとんど含まれず、江戸時代の民間の、自由で活気に満ちた、実に多彩な作品が中心となっていることです。また、いずれの作品も質が高く、全体として上品な雰囲気を持っていることも大きな特徴で、ファインバーグ夫妻の目を通じて集められた、珠玉の名品揃いとなっています。

本展は、このファインバーグ・コレクションを日本で初めてまとまった形で紹介するもので、日本での開催後はニューヨークのメトロポリタン美術館などに巡回予定です。江戸時代の日本美術の精華を、コレクションから選び抜かれた優品約90件によってお楽しみください。

日本美のふるさと 琳派

日本美術の歴史は、遠く一万年以上前の縄文土器に始まりますが、その個性が真に確立するのは、十世紀以降十三世紀までの間、平安時代(七九四年〜一一九二年)の後半から鎌倉時代(一一九二年〜一三三三年)の頃まで待たなければなりません。中国や朝鮮半島からの影響から比較的自由であり得たその時期に、日本列島のおだやかな自然や気候風土に適した美の伝統が形成されました。

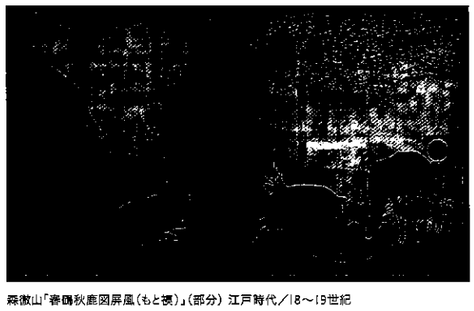
十七世紀初頭、京都の町人俵屋宗達によって、装飾性に優れた日本の古典美術を復興しようとする機運が高まり、その流れは十八世紀初頭の尾形光琳、十九世紀初頭の酒井抱一、そして二十世紀前半の神坂雪佳へと受け継がれていきました。この琳派の流れこそ、日本人の、人生に対する詩的な感情や、草木や鳥、虫などの身近な自然に寄せる深い愛情を、端的に表してきた美術流派といえるでしょう。ファインバーグ・コレクションには、琳派の長い歴史を見通すことの出来る、各世代の素晴らしい作品が揃っています。



俵屋宗達「虎図」江戸時代／17世紀

写生と装飾の融合 円山四条派

江戸時代(一六〇三年〜一八六七年)の官画派である狩野派や土佐派は、絵の手本を中国と日本の古典絵画に求めて、自然の形態や現実の風景を写そうとする姿勢から遠ざかっていきました。狩野派に学んでその弊害を悟った円山応挙は、物の形や実景を忠実に写す"写生"の重要性を自覚し、実践して、みずから新鮮な作品を世に送り出し、そのかたわら多くの門弟を育てました。共鳴者である呉春とともに興した円山四条派は隆盛を極め、やがては勤物画を得意とした森狙仙の森派(大坂に活躍)や岸駒の岸派(京都に活躍)なども派生して、竹内栖鳳ら近代の関西日本画壇の基礎を築いたのでした。ただし、彼らの写生画は外面的な形似にとどまって物の本質にまで鋭く迫るものとはならず、装飾的な効果を追い求めるものでもありました。富を得た庶民層が生活空間の美化を実現する対象として、京都・大坂を中心とする関西圏に活躍した画家たちの写実的な装飾絵画は、もっともふさわしく、願わしいものだったのです。



森徹山「春鶴秋鹿図屏風(もと襖)」(部分) 江戸時代／18〜19世紀

大胆な発想と型破りな造形 奇想派

徳川幕府と各地の大名による武家支配の時代にあっては、現状を保守する姿勢こそが正しくて、革新を求める態度は危険視され、忌避されました。美術界にあっても例外ではなく、武家に寄生する権威的な存在は、新たな画風の展開に消極的でした。一方で経済的な力を増した庶民層は、自分たちの文化や美術を育てるようになり、斬新な個性の登場を待望するようになります。保守よりも革新、停滞よりも前進、常識的な判断よりも大胆な発想、表現上では従来誰も試みなかった型破りな造形を、積極的に歓迎したのでした。

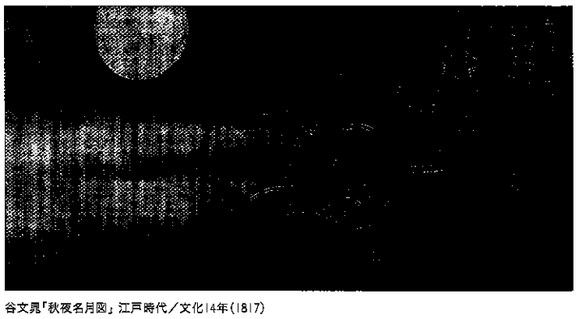
江戸の狩野派中枢に反発した狩野山雪をはじめとして、伊藤若冲、曾我蕭白、長沢蘆雪らはみな、自由で文化的な環境の京都に活躍し、時代の主流となっていた保守的な美術思潮に異を唱え、反発したのでした。彼らの、奇想に発した個性的な造形は、時代を超えた今、異端というよりも正統的な創造として高く評価されています。

葛蛇玉「鯉図」江戸時代／18世紀

中国文化へのあこがれ 文人画

各地に群雄が割拠した戦国の世が終り、日本全国が統一された江戸時代になると、徳川幕府という武家政権が江戸(現在の東京)の地に開かれ、中国で発達した儒学を正統的な思想および政治理念として尊重することになりました。儒学的な教養や漢詩文の愛好は、武家階級にとどまらず町人や農民にまで広く浸透し、中国の知識人(文人)の文化、ひいては生活スタイルそのものまでもが憧れの対象となりました。

美術の分野でも、中国文人画の学習が流行し、明代(一三六八年〜一六四四年)から清代(一六六年〜一九一二年)にかけて出版された木版の本(画論や画譜)から、あるいは長崎にやってきた画家や船載された実物の絵画を通して、絵画理念や描き方を熱心に学んだのでした。はじめは武家の知識人によってうながされた日本文人画の歩みは、町人の池大雅や農民出身の与謝蕪村などの庶民によっても受け継がれ、日本人独特の感性をのびやかに発揮した新鮮な美の領域を開拓していきました。



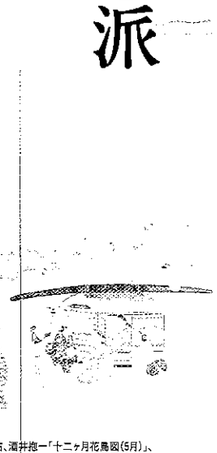
谷文晁「秋夜名月図」江戸時代／文化14年(1817)

都市生活の美化、理想化 浮世絵

古代・中世の時代にも、宮中の行事や貴族の日常を描く絵や、上からの目線で庶民の生活相を描いた絵画は存在しましたが、画家が同時代の人々の生き様を率直に写し出した真の意味の風俗画は、十六世紀後半以降、いわゆる近世になってから生まれました。桃山時代から江戸時代初期に京都で流行した風俗画はやがて新しい権力の所在地になった江戸にその場を移し、浮世絵という新しいジャンルによって受け継がれていくことになります。

浮世絵は木版による版画を表現手段として大衆化していきますが、絵筆で一点一点制作するいわゆる肉筆画も、一部の富裕層に好まれ、盛んに描かれたものでした。遊郭や芝居小屋など遊興の地に取材して、都市生活の華やぎを美しく理想化して表す一方で、説話や物語、あるいは芸能で親しい故事人物も描いています。全国から江戸に往来する人々のみやげ物としても機能した浮世絵は、誰にも分かる平易な表現を特色としましたので、現代の私たちにも共感しやすい表現内容となっています。

葛飾北斎「源頼政の鵺退治図」江戸時代／弘化4年(1847)



上左、歌川国春「遊女と禿図」、上右、酒井抱一「十二ヶ月花鳥図(5月)」、下、鳥居清平「花見遊楽・吉原風俗図屏風」。いずれも部分図。